

平成29年(2017年)8月1日

れきみん

資料館だより

No. Ⅲ-5

相生市立歴史民俗資料館

第4回「史跡めぐり」(児童生徒対象)開催!

夏休みに入った7月22日(土)、10名の参加者(小学生、保護者・教員等)とともに第4回「史跡めぐり」を行いました。

歴史民俗資料館での生涯学習課長あいさつ・事前説明・展示見学の後、那波野・古池地区の史跡をめぐりました。



那波野古墳 横穴式石室の観察

最初に西法寺を訪ね、移築された若狭野陣屋表御門・ど根性わらべ地蔵を見学し、続いて相生市の代表的な古墳である塚森古墳と那波野古墳を観察しました。塚森古墳(墳長約60mの帆立貝形前方後円墳)では墳丘に上り、復元図をもとに濠跡を確認しました。また、那波野古墳(県指定史跡、墳径約30mの円墳、巨大な横穴式石室)では石室に入り、石室の規模や用石の巨大さを体感しました。最後に、東部墓園に建立されている相生平和記念碑を訪ね、記念碑の由来等を学び平和について考えました。

〈資料紹介4〉3代目ペーロン艇「天龍」

7月22日(土)の午後、長崎放送報道制作局テレビ制作部(柴田知恵ディレクター・今村敏和カメラマン)にから、当資料館のペーロン関係資料について取材を受けました。特に、長崎市との交流、ペーロン競漕の古写真とともにペーロン艇について質問を受けましたので、ここで当資料館に展示している3代目ペーロン艇「天龍」について紹介します。

3代目ペーロン艇「天龍」は「白龍」「神龍」とともに1953年(昭和28)に播磨造船所で建造され、32年に渡って活躍しました。

全長13.55m、中央部幅1.75mを測ります。総重量は860kgあり、檣材が各所に使用されています。総員は40名(艇長1名・指揮者2名・舵取1名・ドラ1名・太鼓1名・漕手34名)です。舵棒は、伝馬船の檣が用いられ、長さ・重量とも、現在のものとは比べ物にならないほど大きなものです。一方、櫂の刃の先端幅は小さく、10cm

しかありません。

みよし（船首部分）は龍の「長く伸びた口」もしくは「尖った頭」を表現しているいわれ、黒色に塗装されています。最先端は赤色に塗られ、艇名の一文字「天」が白色で記されている。中央部に紅白の布を巻き、さらに紅白のしめ縄で縛ってひょうたん形に結びあげています。後方部には艇旗が取り付けられます。

両舷の前方には矢模様が描かれています。矢模様先端の白く塗られた膨らんだ部分は、鏃を誇張させたようでもあり、龍の目を表現したようでもあります。

艇内中央部に太鼓が、後方部には銅鑼（径 79cm、銅・錫・亜鉛などの合金）が設置され、銅鑼掛の前方上部には御幣が取り付けられます。

初代ペーロン艇（焼納され現存しない）は長崎のペーロン艇見取り図の写しをもとに建造されたといわれています。加えて、ペーロン艇に「天龍」「飛龍」などの艇名を付すのは長崎では手熊地区のみであることから、初代ペーロン艇の建造に手熊地区関係者が関与した可能性が高いと思われます。

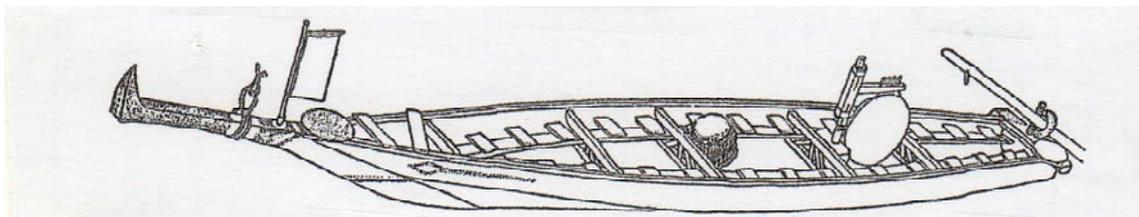
3代目までは、規模・構造・形状・乗員等において初代および2代目（「雲龍」はJR相生駅新幹線コンコースに保存・展示）のペーロン艇を踏襲しているの、当資料館展示の「天龍」も、大正時代の長崎手熊地区ペーロン艇の原形を保っているものと考えられます。

1976年（昭和51）、読売テレビ番組「びくり日本新記録」の企画で、3代目「天龍」は長崎に陸送され、長崎国際埠頭（松ヶ枝）海上保安庁前で長崎ペーロン艇と競漕しました。しかし、スピードを重視し小型化・軽量化した長崎ペーロン艇に敗れました。

その後も琵琶湖まで遠征するなどして活躍し、1984年（昭和59）まで使用されました。翌1985年（昭和60）1月4日の当資料館開館に合わせて保存・展示されることになり、現在に至っています。

1980年（昭和52）には、4代目「飛龍」「雲龍」「昇龍」が建造されましたが、以降は、型式は踏襲しつつも、選手集めや長崎との交流を考慮して小型化し（全長12m、中央部幅1.58m、総重量500kg、総員32名）、現在の10代目まで引き継がれています。

ペーロン競漕が相生市の無形文化財に指定された今、改めて3代目「天龍」を大切に保存・展示し、価値を伝えていきたいものです。



3代目ペーロン艇「天龍」図 佐々木 1987

〈参考文献・図出展〉

佐々木泰彦 1987「相生ペーロン祭」『相生市史』第4巻（相生市・相生市教育委員会）

西角義一 2008『発祥・伝来・そして今 相生ペーロン競漕』（相生ペーロン協会）

西角義一 2011『相生ペーロン競漕 簡単ガイド』（相生ペーロン協会）

（中濱久喜）